



よつば会だより

2024年5月号

発行: 毎月1回

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原町 5083-1

TEL 0848-23-8755

5月を迎えました。5月は昔から、明るい青空のもと鯉幟が空高く泳ぐ、1年中でも最も過ごしやすい季節だったのですが、今年は一気に真夏に突入するのではないかと危惧されます。新聞に日本全国各地の前日の最高気温と平年の最高気温が毎日報じられていて、広島市の状況を見ているのですが、4月後半で平年より5度以上高い日が多く見られました。7月・8月の最高気温が平年より5度高くなったらと思うと、高齢者には乗り切ることができるのか不安になります。秋になって涼しい顔で夏を振り返ることになりますように。



～分かり易い「家族のSST」での教えが忘れられません～ 西川浩司さんが厚生労働省勤務に



2024年3月吉日付の、尾道市役所健康推進課からの FAX 文章が、「よつば会」宛に届きました。送付者は、健康推進課こころサポート事業担当ソーシャルワーカー(精神保健福祉士)西川浩司さんでした。西川さんの FAX 文章を以下に示します。

「平素からお世話になっております。大変ご無沙汰しております。皆様お変わりございませんでしょうか？ さて、私事で恐縮ですが、今年度末をもって現在の職場、西川退職をいたします。4月からは「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築」の相談支援専門官として、厚生労働省に勤務することになりました。在職中は大変お世話になりました。ありがとうございました。

家族会の皆様とは、法人(尾道のぞみ会)に事務局があったときからのお付き合いで、その後も、家族のSSTや法改正の際のご説明や個別の支援など、さまざまな思い出が蘇ってきます。本来であれば直接お会いして御礼申し上げないといけないところ、このような形でのご報告になってしまい大変申し訳ございません。(残務整理や引継ぎなどで時間の調整が困難となりました。本当にすみません)働く場所は変わりますが、精神保健福祉医療の取組は変わりません。精神障害者を取り巻く環境が少しでも良くなるよう励んでまいります。これまで本当に有難うございました」

以上が本文です。私たちにとっては、西川さんの転勤は残念なことですが、これまでの尾道における、こころサポート事業をはじめとする西川さんの献身的なご努力が認められての抜擢人事だと思います。これからのますますのご活躍をお祈りしましょう。



新・旧よつば会の総会を行います



よつば会だより4月号で、よつば会が、4月から「任意団体」に代わったことをお伝えしました。会員の皆さまには、その4月号を送付した際に「指定共同生活援助事業の運営に関して」という文書を同封しました。その文書にあるように、よつば会は「指定共同生活援助事業(グループホームの運営)」から離れることになり、必然的に「NPO 法人」の肩書も返上することになりました。これからの活動は任意団体としての、尾道市における精神障害者の家族会として、「尾道こころネットよつば会」の活動を行っていきます。

以上のような経緯から、4月からは NPO 法人ではなくなったのですが、提出しなければならない、令和5年度にかかわる事業報告、会計報告や法人解散の承認を得る総会を開く必要があります。そのために5月19日(日)の13時30分から開催予定のよつば会家族教室の前に「NPO 法人としての総会」と任意団体として発足する「尾道こころネットよつば会としての発足にかかわる総会」を行います。多くの会員の方のご出席を願っています。

4月の活動報告

- 14日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 21日 よつば会家族教室 (市民センター)

5月の活動予定

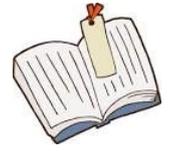
- 12日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 19日(日) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)

* 総会終了後から家族教室を行います





～精神科医療が変わるような画期的きっかけと希望に～ オープンダイアログとは



「オープンダイアログをベースとした対話会 **おのみち語り工房**」と題した文章をよつば会に届けていた方が、4月6日にご夫婦でサロンに来られて、2時間ばかり話して帰られました。尾道市の精神の病を持った人の状況を知りたいということだったので4月21日に行う「よつば会家族教室」に参加してもらうことにしました。

オープンダイアログは、以前に「みんなねっと」誌でたびたび取り上げられていて、その記事を通して、ダイアログは会話という意味の言葉で、会話を通して精神の病の状況改善を図る営みぐらいの記憶はあったものの、それ以上の詳しい内容は頭から消えてしまっていました。そこで、「みんなねっと」誌のバックナンバーをあたってみました。オープンダイアログにかかわる記事は、2018年の4月号から2019年の12月号までの、21回の連続記事になっていました。その21回の記事に改めて目を通して見ました。

記事の寄稿者は多くは訪問看護を行っている方で、精神科医師の方が2名ばかりおられました。私が記事の中に求めていたのは、「オープンダイアログとはどういうものかという説明」でしたが、寄稿者がオープンダイアログの実践者で、どういうものなのかは既知のこととして、実践の中で思ったことなどを原稿にしていたので、ぴったりくる説明の記事には出会えませんでした。それでも、それらしき文章を訪問看護ステーションの看護師の方の記事に見いだすことができたので、その文章を次に示します。

「オープンダイアログは、精神の病を抱える人に対して、その病状や症状を聞いて診断をするプロセスをいったん脇に置き、まずはご本人や家族のニーズを聞いて、そのニーズに沿ってアプローチするという考え方である。極めてシンプルだが、フィンランドでは精神科救急の現場で開始され、その結果、精神科病院への入院数を激減させたのだ。この事実を知ったときは衝撃的だった。診断の向こう側に置いてきぼりにされている声に出せない思いが、もしあるのだとしたら、今ここで、その声を聞かせていただくために、私たちにできることがあるのではないだろうか。そしてオープンダイアログに学ぶ日々が始まった」

また、「オープンダイアログって何だろう？」という問いかけから始まる座談会の記事があり、精神保健福祉士や作業療法士、看護師、薬剤師になどの方が答えている記事がありました。答を列挙します。

「フィンランドの精神医療システム」、「開かれた対話、自由な感覚でキャッチボールできる対話」、「精神科医療が変わるような画期的なきっかけと希望」、「伝えあうこと。相手を大切な存在として接する。一緒に悩み、話す」、「当事者を取り巻く『大切な関係』を、精神医療の中に持ってきた」、「話したことが大切にされる場。安心して話せる場」

これらの答は、オープンダイアログの一面を表現したものと受けとめることができるでしょう。同時に、オープンダイアログは幅に広い奥行きのある深いものだというのを感じさせてくれます。学ぶことがすごくあるとも言えるでしょう。また、別の看護ステーションの方からの、「オープンダイアログって何だろう」という記事の中で私が大きくなすいた文章があったので紹介しておきます。

「解釈をしないこと、誘導をしないこと、答えを提示しないこと、こちらが話し過ぎないこと。いずれも気を付けている割に、しょっちゅうしてしまうことです。まだまだです」

学ぶことの深さを感じている方の思いでしょう。

(N.T)